【Zoom】いのちの躍動の舞――最も大切なもの　　　　令和３年１月２３日（土）

　前回（1/9）、フィディアス作ディオニュソスを見て、

「お前は最も大切なものを忘れている」（最も大切なものへの気魄）

「お前は死んでいる（活溌溌地を失っている）」

この言葉が突き付けられた体験を語りました。

　それは私自身の姿勢（体の姿勢も、心の姿勢も両方含めて）だけでなく、パルテノンギャラリーにいるすべての人の姿勢（さらには地球にいる人の姿勢）にも突き付けられていると私は感じました。

　私のライフワーク、人生の課題は、フィディアス作ディオニュソスに満ち溢れているいのちの躍動を私自身生き、人にもすすめ共に生きること。

　この課題は身心と分かれる前のいのちの姿勢の一つのものですが、神話的・精神的側面での「ディオニュソス的なもの」と、フィディアス作の彫刻ディオニュソスから学んだことと、二つに分けて書いていきたいと思います。

問題は、元気に充ち、活溌溌地な心身であるためには、どうしたらよいのかという点です。「心身のマネジメント」をいかにするか、という問題ともいえるかと思いますので、今回は、この観点から見ていきたいと思います。

私は去年（2020年）、ドラッカー著『マネジメント』（ダイヤモンド社）を初めて読んだのですが、この原稿で論じていることと深く関連する点がありましたので、それを紹介します。ドラッカーは「経営の神様」と呼ばれることもある人で、その著書『マネジメント』は経営に関する本の中で世界で一番読まれた本であるとのことです。

●人こそ最大の資産である

　ドラッカーは、次のように書いています。

　 人こそ最大の資産である（81頁）

 もちろん、土地や建物や財産、あるいは会社や組織、道具や物品も「資産」ですが、多くの「資産」の中で最も重要なものは「人間」自身だというのです。これはその通りだと思います。私たちは、「人間」という資産を、活かして生きているでしょうか？　実は、ドラッカーが「マネジメント」の問題で、最も重要視するのは、「人」という資産がいかに有効に用いられていないかという点です。ドラッカーは、次のように書いています。

人のマネジメントとは、人の強みを発揮させることである。人は弱い。悲しいほどに弱い。（中略）　マネジメントのほとんどが、あらゆる資源のうち人がもっとも活用されず、その潜在能力も開発されていないことを知っている。（81頁）

　いろいろな資源や資産を、私たちは無駄にしてしまいがちですが、中でも最も無駄にしてしまいがちな貴重な資源が「人間」自身なのでしょう。人間は、さまざまな潜在能力をもっていますが、それが開発されないままだと、せっかくの潜在能力も無駄になってしまいます。

　だらけたままでいて自分に言い訳をして過ごしたり、ただ周りに適当に流されるだけだったり、あるいは思い込みに染まっていたりであったり、いろいろな要因があるでしょうが、尊い資産を無駄にしてしまうことは、なんともったいないことでしょう。これは人間のもっている直ることのない人間のクセであり、弱さ、悲しさなのかもしれません。

このような悲しいクセや弱さがあることを見すえながら、いかにして、「有効な資源」として自分を活かし、人を活かし、資産（本来持っているもの、天賦のもの）を発揮していけるようにすることが、極めて重要であると思います。

ドラッカーは主に組織論、リーダーシップ論として、議論を展開していきます。それは私たち禅を学ぶ者が読んでも、大いに啓発されるところがあります。（禅は、単に組織論の観点からでなく、人間そのものに、天賦の資産を無駄にしてしまう傾向があることを見すえ、この問題の根底にまで徹底的に立ち返って問題に取り組むところに、その本質があるように思います。）

ドラッカー自身も、一般論的な問題としてでなく、自分自身において、本来の資産をいかに発揮するかという点を深く問題にしていますので、次にそれを見ていきたいと思います。

●ドラッカーが18歳で抱いた問題意識

　ドラッカーと、ダイエーの創業者である中内㓛氏との往復書簡が出版されていますが、そこでドラッカーが、自身の18歳の時に抱いた大事な問題意識を語っていますので、それを紹介します。

　中内氏が、人はどうしたら、活性化し、効果のあるような仕事ぶり、生き方をできるのか、というような問いをドラッカーに投げかけます。それに対して、ドラッカーは、自分自身が、いかにして活力に満ち、溌剌として仕事に取組んでいくかは、長年にわたって中心的な問題であったと述べています。そして、ドラッカーの人生において、「成果をあげられるようにし、成長と変化を続けられるようにしてくれた教訓、過去の囚人となることなく成長することを可能にしてくれた」いくつかの経験を語っています。

　禅の言葉でいえば、本来具足の自性（本性）を発揮し、活溌溌地でありうるか、という問題です。ドラッカーは、「過去の囚人」と書いていますが、ともすると私たちは、すぐに「囚人」のように、自分で自分を牢獄に閉じ込めてしまうようなクセがありますから、それを絶えず打ち破っていく必要があるわけです。

●ヴェルディの言葉

　ドラッカーは18歳の時、ヴェルディ作曲のオペラ「ファルスタッフ」を見ました。実に躍動的で愉快なオペラです。このオペラを見終えた後で、ドラッカーは、このオペラはヴェルディが８０歳を超えてから作曲した作品であることを知り驚きます。ヴェルディ自身、「８０歳を超えて、まだなおこのような莫大な労力が必要となるこのような大作に挑もうと思ったのはどうしてか？」との質問されたのに対して、次のように答えていることをドラッカーは知りました。

　　「いつも失敗してきた。だから、もう一度挑戦する必要があった」。

　このヴェルディの言葉にドラッカーは衝撃を受けました。ヴェルディは、社会からの評価で言えば、有名で成功した音楽家として実力も名声も申し分なかったわけですが、ヴェルディの内面は、そのような社会からの評価とは全く別の次元を見すえていました。その都度取り組んでいる作品に全力を挙げても、後で振り返ると完成からは程遠いことに、ヴェルディは繰り返し気づかされたのです。それでめげてしまうのでなく、逆に、失敗を次の取り組みへの原動力としたのです。

　原書で元の英文を見ますと、「I surely had an obligation to make one more try」、直訳すると「私には、もう一度挑戦する義務が確かにあった」となります。ドラッカーはこのヴェルディの姿勢に深く感銘を受け、自分も死ぬまでこれを「生きる指針」にしようと誓ったことを述べています。「努力し続けることが、老いぼれてしまうのでなく、成熟し続ける秘訣である」。

　この点は、仏道、禅の道においても全く同じでしょう。「道を最後までいきついた」と完了形で言えるようなものではありませんし、形を超えたものへの無限の努力精進が、活溌溌地であり続ける秘訣だと思います。

●フィディアスの言葉

　ドラッカーが、二つ目に挙げる体験と、そこで紹介されている言葉が、私の心に直接に響きました。それは、パルテノン神殿（彫刻を含む）を作った彫刻家フィディアスの話です。ドラッカーは、１８歳の時、先に紹介したヴェルディの話の後くらいに、フィディアスに関する次の話を読み、とても感銘を受けたと述べています。

　フィディアスは、パルテノン神殿と彫刻群の製造費を、アテネの会計官に請求すると、会計官は、次のように言ってそれを拒んだそうです。「パルテノン神殿の彫刻は、地上から見上げるほど高い屋根の部分にある。人がそれを眺めた際、その背中の部分は全く見えない。それなのにあなたは背中の部分まで細かく彫って、その分まで請求しているが、その部分の金は払えない」、と。

　これに対してフィディアスは、「あなたは間違っている。（人からは見えなくとも）神々が見ている」と答えたそうです。これを読んで、ドラッカーは、とても感銘を受け、このような姿勢は常に重要であると心に刻んだとのことです。

　ドラッカーは８０歳を超えてから、この文章を書いているのですが、それまで長年、経営の指導者として生きてきて、成果を挙げ続け、常に溌剌とした仕事をし続ける人は、フィディアスと同じ仕事観を持っていることに気づいたと書いています。「人にはわからないから、いいや」ではなく、真摯に事に取り組むという仕事観です。それは仕事に対して真摯であると同時に、自分自身に対しても真摯であることです。このような姿勢で物事に取り組むことで、はじめて活溌溌地でありうるでしょう。

●私自身が受けたフィディアスからの衝撃

さて、ドラッカーが、１８歳の時にフィディアスの言葉に感銘を受けたことを紹介しましたが、私自身フィディアスの作品から発せられる言葉に、人生で最大の衝撃を受けました。ドラッカーの本で紹介されているフィディアスの言葉は「You are wrong（お前は間違っている）」ですが、私は、フィディアス作ディオニュソスの前に立つたびに、私自身の根本の間違いを明確に指摘されていることを痛感します。

　私自身（や多くの禅修行者）の坐禅の姿勢は、ディオニュソスが実に活き活き・活発とした坐りであるのに比べると完全に「死坐」です。これは坐禅をする人だけの問題でなく、普通の人が椅子に坐る姿勢でも、ディオニュソスに比べると「死坐」だと思えます。

　大英博物館のパルテノンの部屋にいると、一応は生きている人間が全員「死坐」をしており、フィディアスの作った彫刻だけが、活溌溌地に躍動をしているのを見ると、私はいつも愕然とします。フィディアスが、私に向けてだけでなく、アダムをはじめとしてすべての人間に、「お前は活き活き溌剌とした生き物であるように命の息を受けているのに、それを無駄にしているのは完全に間違っている（You are wrong）」と言われているかのように思います。

●臨済禅師の教えを学ぶ際の問題

　そしてこれは、私自身の「坐禅の姿勢」だけの問題でなく、「禅を学ぶ姿勢」の間違いをも、フィディアス作の彫刻の前に立つと突き付けられたと、はっきりと感じました。私は臨済宗に属していますので、『臨済録』を繰り返し読んでいます。学者や禅僧が解説した本も読みますし、現在でも、臨済録を読む勉強会に出たりしています。私を含め、臨済録を学ぶ禅僧が、「禅の歴史は～で、臨済録でのこの言葉の意味はコレコレと理解できました」という次元での学びにとどまっていたとしたら、臨済禅師の弟子としてみた場合には、大間違いの真っただ中にいるのではないでしょうか？　もちろん言葉をなるべく正確に理解することはとても大事なことで、その点で、解説本や学者の説明は、とてもありがたいことで大いに役にたちます。

　ですが、臨済禅師の言葉は、「お前は文字を追って禅を理解しようとしているが、それ自体が大間違いだ！」「祖師の活きたものを全く失っている」などと、目の前の相手の大間違いを、実に丁寧に激しく叱責してくれている言葉ばかりなのです。

『臨済録』の大衆に話した言葉（示衆）の中だけで見ても、「汝、錯まることなかれ」「大いに錯まり了れり」など、「錯」の文字が16回も用いられています。しかもこれは一般論としての間違いを論じているのではなく、目の前の相手に対して、「お前は間違っている」と明確に突き付けているのです。

その臨済禅師の言葉を読む私たち禅僧が、自分の誤りを叱責してくれている言葉として受け取らず、「臨済禅師は～の考えが間違っていることを言っている」というように他人事か一般論として読んでいたら、完全な大間違いなわけです。

　千年以上前に亡くなっている臨済禅師のみが、活溌溌地に躍動しており、それを学んでいる私たち禅僧が、ほとんど死んでいるように精彩を欠いているように思えてしまいます。ちょうど、ただの「石」であるフィディアス作ディオニュソス像が、活き活き・溌剌とし、命の躍動に満ち溢れているのに対し、それを見ている私たち人間がほとんど死んでいるのと同じような状況だと思います。

●大いなる命の息

　臨済禅師から活溌溌地な心身であることを学ぼうと思うなら、まずは、臨済禅師が繰り返し突き付ける「大いに錯まり了れり」を自分自身に直接言われた言葉として真剣に受け取ることが極めて重要と思います。そして、私にこのことを痛感させてくれたのはフィディアス作ディオニュソスでした。私（やアダムをはじめとする人間）の姿勢は、ミケランジェロ画アダムのように、腰抜け気抜けの姿勢で生きているのに対し、フィディアスは最も大事なことを突き付けてくれます。西田幾多郎は、

「フィディヤスの鑿の尖（さき）から…流れ出づるものは…生命の流れである。…そこには生命の大なる気息le grand souffle de la vieがある」

と書いていますが、私たち人間はこの「大いなる命の息」の恵みを現に受けて生きているのです。

　私が高校生の時に課題図書で読んだ本（ロマン・ロラン『ベートーヴェンの生涯』岩波文庫）に、次の言葉が記されていました。

諸君がみずから意識しないときですら諸君は古代の諸彫刻作品の石の心臓に眠っている息を吸い込んでいるではないか。フィディアスの感覚と理性と生命の火との調和を吸い込んでいるではないか。（215頁）

　私たちは、意識してないかもしれませんが、この大いなる「命の息」「命の火」を吸って生きているのだと思います。ですがこの人間で一番大切なことを私たちは常に忘れがちです。ですので、常に臨済禅師の「大錯了也」、フィディアスの「You are wrong」という言葉を常に新たに聴き続けていくことが、命の息を無駄にせず活溌溌地に生きていくために必要だと私は思っています。

◎高校の教科書を読んで「へー、面白いな」と思った「絶対矛盾の自己同一」

　主に大学院以降、熱心に読んだ（禅修行と並行して）。

　西田幾多郎の論文「絶対矛盾的自己同一」。

　「ディオニュソス的なものが働いていると思う。ディオニュソス的舞踊から…」

　・死と再生の舞としての「ディオニュソス的舞踊」

　これが「人間形成の根柢に働いている」。

　この底にはたらいているものは、通常、見逃され、忘れ去られているが、ここに気づき、いのちの躍動の舞をなすこと可能。やっていこう！

　この実践の道。

・私が理解したところでの「絶対矛盾の自己同一」

①生きるとは、課題を課せられているということ。

②「ここがロドスが、ここで跳べ」（ここにバラがある、ここで踊れ。十字架を背負う中にバラ＝喜びがある。）

③ディオニュソス的なもの（ディオニュソス的舞踊）が底に働いている。いつ何をしていてもこの舞（ディオニュソス的舞踊）をなそう。

◎私が最初に読んだ哲学書。

プラトン著『饗宴』

哲学の第一歩の課題。　これに私は取り組んだ。

　「いかに楽に酒を飲むか」

美への愛。知への愛。これを自分も実践し、人にも勧める、というソクラテス。

　ディオニュソス道を歩むのがソクラテス。

・『パイドン』

　「杖をもつ人は多いが、バッカスは少ない。バッカスとは知を愛する者。私自身、ずっと努力してきた」とソクラテス。

　バッカスであることの生涯続く努力。

　これを身体も含めてやっていこう。